別記第２号様式（第３条関係）

視察概要書

１　視察日時　　令和５年１１月１５日（水）午前１０時００分～午前１１時００分

２　視 察 先　　ソーシャルグッドロースターズ千代田
（住所　：　東京都千代田区神田錦町
１－１４－１３―２Ｆ）

３　調査事項　　カフェを併設した就労継続支援施設の見学

４　視察先概要

（１）　説明者　　一般社団法人ビーンズ代表　坂野 拓海　氏

（２）　視察先概要：ソーシャルグッドロースターズ千代田（就労継続支援Ｂ型施設）

▲福祉施設が入っているビル

5　調査項目：
（1）カフェを併設した就労継続支援施設の見学、施設の概要について

6　視察（見学）の目的
　カフェを併設した福祉施設として、新しい形の作業所の運営に取り組んでいる先進的な施設を調査・研究するもの

7　施設等の概要
　ソーシャルグッドロースターズは千代田区との協同で設立された福祉施設（就労継続支援Ｂ型）である。障がいのある方がコーヒーの仕事を通じて自立することを支援している。焙煎所を兼ねるロースタリーカフェでありながら、障がいがある人が働く福祉施設でもあり、様々な障がいのある人たちが、コーヒーづくりから接客に至るまで、それぞれ得意な分野を担当しながら専門的な経験を積める就労の場として活用されている。

▸ソーシャルグッドロースターズのビジョン

Leave No One Behind（ 誰一人、取り残さない ）

▸ソーシャルグッドロースターズのミッション

常に取り残される少数の側に立って、
今の時代に必要とされる生きるための選択肢をつくること

ソーシャルグッドロースターズ千代田では、障がいのある方の仕事やライフスタイルの選択肢を広げるための施設や家族を支えるための活動が行われている。

←中央に描かれているのは、施設のシンボルマークのハシビロコウ。
ハシビロコウは「動かない鳥」として有名な鳥である。
このシンボルは１人１人のペースにあわせて「動かずに待つ」という
施設のスタンスを表現している。

施設には、５年前は日本に数台しかなかった本格的な焙煎機が導入されている。千代田区との協同で設立されている施設であることから、導入に当たっては、福祉作業所にこれほど本格的な機械がいるのかという声もあったそうだが、「前に出て挑戦することが必要な経験」と考え、コーヒーを極められる環境を作ってあげることの重要性について思いを伝え、導入について理解していただいたとのこと。

代表の坂野さんは、「仕事において大事なのは、仕事があることではなく、自信とやりがい、そして商品が売れることによる収入があること。当たり前のことであるが、その当たり前のことを福祉施設でもやりたいという思いで、この施設を作った。」と語られていた。

▲中央が代表の坂野氏

▲視察中の様子

カフェの福祉作業所のほかに、近くに２か所の事務所がある。

福祉作業所の利用者は３６名で、健常者スタッフ７名、ピアスタッフ（障がいがある指導スタッフ）が３名在籍。

見学を実施した当日は、作業所には１０名程度の方が働いていたが、そのうち健常者スタッフは２名のみで、大半は障がいのある方で営業されていた。

▸ソーシャルグッドロースターズでの主な仕事内容

ハンドソーティング	輸入した生豆の中に含まれる形や大きさが不揃いな豆や青カビが付着した豆を取り除く
焙　煎	ハンドソーティングをした生豆を焙煎機で焙煎する
商品の製造	コーヒーバッグの製造や豆の袋詰めなど商品化する工程
抽　出	点灯で注文されたドリンクを、ハンドドリップやエスプレッソマシンで抽出
接　客	商品を提供するなどカウンターでの接客を行う

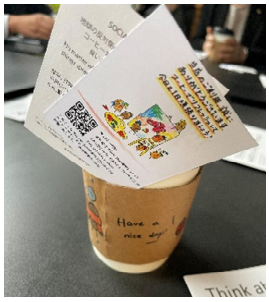
◂ハンドソーティングの説明をしている様子

代表の坂野氏によると、

「ハンドソーティングは、手間暇をかけるほどおいしいコーヒーができる。一般のコーヒーショップでも行われていることだが、ここでは、作業する人数が多いいことからハンドソーティングを徹底的に行うことができ、また、利用者の方は、臨機応変に対応できないこともあるが、一つのことに集中する力はすごく、クオリティの高い製品を作ることができる。」とのこと。

コーヒー豆やドリップバッグ、タンブラーなど商品の製造も福祉作業所の利用者で企画し行われている。障がいがある方の特別な感性を活かしながら、商品パッケージのデザイン等も作られている。障がいの程度により作業所に来れない方は、コーヒーカップのスリーブに手書きで絵を描くなど、特性に合わせて作業を行っている。

▲店内入口には、様々な商品が並ぶ



▲商品のコーヒー

▲商品紹介のカード。絵は利用者が描いたもの

▲スリーブはひとつひとつ手書き

代表の坂野さんは、「ここの施設は、かっこいい場所を誰かが用意した職場ではなく、自分たちで作り上げる、誇りを持って働ける職場である。どんな困難を抱えていても一人の人間として自分らしくありたいという思いは、障がいのある方もそのご家族も同じであり、その思いをどう実現していくか、環境をどう作っていくかを考えるのが福祉事業者の役割である。この作業所で作った商品は、地域の方にも喜ばれており、また、ふるさと納税等いろいろな形で使っていただくことで、「情け」ではなく、当たり前に福祉の商品が地域の中で流通していく。また、おいしいという評判になって広がっていって、それが利用者の収入だけではなく誇りにつながっていく。そういった循環を目指していきたい。」と語られていた。

カフェのテラス席で意見交換を行っている様子▶